「春日左拋御前法楽独吟百韻」訳注（二）

付「春日の末社左拋」考

伊藤伸江・奥田　勲

「春日左拋御前法楽独吟百韻」訳注（二）

【凡例】

一、底本は、櫻井健太郎氏本『宇良葉』に付載された宗祇の「春日左拋御前法楽独吟百韻」である。対校本に、①北海学園北駕文庫本（16－28－16－2、D613、写一冊、100000264 3）、②北海学園北駕文庫本（16－34－4－8、D601、写一冊、100000267 1）、③大阪天満宮文庫本（359－11－4－14、写一冊、100201215）、④京大平松文庫春日末社左［ナゲ］法楽（マイクロフィルム番号MNO:P5515）、⑤東大国文研究室蔵『連歌名句』（中世12：7-9）を使用し、校異を示した。①～③、⑤は国文学研究資料館の紙焼き写真、④は京大図書館のHPを参照した。

一、注釈本文は、読解の便をはかるため、底本を歴史的仮名遣い表記にあらためて清濁を付した。原文は翻刻の形で示し「愛知県立大学日本文化学部論集」第九号（二〇一八・三）に掲載しており、適宜参照されたい。注釈本文においては、原文の表記の誤りと考えられる箇所はあらため、あて字、異体字、送り仮名は標準的な表記に直して示した。漢字表記が自然である語句に関しては、全体の統一を考えて漢字に直し、難読語句には、校注者が括

弧書きで振り仮名を付し、踊り字はすべて開いている。校注者による改訂部分のうち、特記すべきものは、注釈内に付記した。

一、各句には、百韻全体の通し番号を句頭に示し、参考として、各懐紙内でのその句の所在を懐紙の順、表と裏の別、表裏ごとの句の番号で表し、前句を添えた。

一、【語釈】にあげる和歌、連歌例は、後述引用文献による。百韻の読解に有効な際には、先例のみならず後代の作品も例示する場合がある。私に清濁を付し、片仮名など読解に不便な文字は必要に応じ平仮名に改め、漢字表記が自然である語句に関しては、全体の統一を考えて漢字に直した場合がある。

一、各句には、【式目】【語釈】【現代語訳】の説明項目を設けると共に、二句一連の連歌の中で句がどのように作用するか、及び独立した一句ではどんな意味を持つかに配慮して【現代語訳】の他に【付合】【一句立】の項目を設けた。さらに必要な場合には、【考察】【補説】【他出文献】の項目も設けた。

（初折・裏・三）　つもらむほどぞ雪に見えたる

一一　年はまだ若木の松のかたぶきて

【式目】冬（年はまだ）　年中立春可為冬季（新式今案）

【語釈】○**年はまだ**…年はまだ今年のうちで。ここは「若木（若き）」に続けて、「年齢はまだ若く」との意味もかけている。「いとはやも春はきにけり年はまだこよみのおくの廿日あまりに」（逍遊集・年内立春・69）。○**若木**…生えてまだ年月が多くたっていない木。和歌では、通常梅や桜の若い木、もしくは花がまだ咲かない幼木を詠み、特に桜は、源氏物語・須磨の巻で、光源氏が桜を植えた逸話により多く詠まれる。「須磨には、年かへりて日長くつれづれなるに、植ゑし若木の桜ほのかに咲きそめて、そらのけしきうららかなるに」（源氏物語・須磨）。「若木トアラバ、

梅　桜」（連珠合璧集）。「しばしみよとの花はうらめし／老の後うへし若木の梅咲て」（萱草・102／103）。「わか木の桜ちりなゝらひそ／松のはに春の風ふく山がくれ」（文明十八年二月六日何人百韻・60・61／明賢・宗昭）。それゆえ、「若木」で松を詠むのは珍しい。「春ごとの緑に枝のかずみえてわかぎの松のよはひをぞしる」（実兼集・松・21）。「庭の面やまつも若木のかげしめて契りあらはにみゆるひな鶴」（碧玉集・雑・1042・鶴）。あえて松を詠んだのは、「老木の松」との対比を意図したのであろう。「わかの浦や老木の松にふる雪のつもれる年も今ぞかひある」（新続古今集・応永十四年内裏三首歌合に、浦雪・前大納言為定女）のように、老松に雪の積もった姿は歌に詠まれる。なお、宗祇は文明三年、五十一歳の時、東常縁に古今伝授を受けた際の長歌でみずからを老木の松と表現している。「…老木の松の　おもほえず　かかる嬉しき　春にあひて…」（宗祇集・文明三年長歌・267）。「雪トアラバ、…松」（連珠合璧集）。「可大賢人業／老木のまつにつもる雪かな」（菟玖波集・嘉暦四年七月内裏の聯句の連歌に・後光明照院前関白左大臣）。○**かたぶきて**…傾き曲がっていて。「笠の雪つららの杖をつく松の老かたぶきて立てる庭かな」（草根集・松雪・10603・長禄二年十二月七日詠）。

【付合】前句に「雪に見えたる」と表現されるものが、年月であると付けた句。「つもる」から「年」が呼び出される。雪にしなった「若木の松」の姿は、若々しい緑の情景であり、長寿を表す老木の松との対比であるが、この先育っていく長い年月のことも想像させる。

【一句立】雪の重みにしなう、まだ細く若々しい若松の様子を表現している。

【現代語訳】また一年を重ね、年が積もっていくであろう様子は、雪の降り積もるさまのうちに見えていることだ。今年はまだ暮れておらず、年若い若木の松が、雪の重みに傾いているが。

（初折・裏・四）　年はまだ若木の松のかたぶきて

一二　わがよはひこそ思ひしらるれ

四七

四八

【式目】述懐（よはひ）

【語釈】○**わがよはひ**…自分の年齢。「ながむればふけ行くそらの月よりもわがよはひこそかたぶきにけれ」（続後撰集・雑中・1107・祝部成仲）。「おしむ名もたゞなをざりのほど／身のいかになるともよしや我よはひ」（文明十三年二月二十四日何船百韻・28／29・能孝／宗祇）。「かたぶくからに寒き冬の日／我齢今年も暮ればいかゞせん」（竹林抄・冬・679・智蘊）。○**思ひしらるれ**…思い知られることだ。雪をかぶった松のかたむきを腰のまがった老人の姿と見る歌例があり、この句も「かたぶきて」の連想から老齢の自分を見つめている。「なれもみよ雪にかたぶく庭の松つもれば人の老のすがたを」（松下集・自歌合・庭上雪・2892）。

【付合】月や日は一日かけて空をめぐり、傾き、沈んでいく。そのことから、前句の「かたぶきて」に老年を思い、「よはひ」を思いおこした。老松から老いた自分の年齢を思う歌に西行歌「むかし見し松は老木になりにけり我が年へたるほども知られて」（山家集・雑・1145）があり、ここは若い松の姿に自らを思う形である。前句と付句が、若さと老いの対比を表現している。

【一句立】前句の若い松の姿に、老いた自分をかえりみての思いを付けている。

【現代語訳】若木の松が、年は若くても傾いて生えている。それを見ると、腰がまがるほどに年を重ねて老いた私の年齢がしみじみと思い知られることだ。

【他出文献】老葉（吉川本）1087

一二・一三の付合は、文明十三年の『初編老葉』の編纂に際して、恋連歌下の巻軸に置かれる。

（初折・裏・五）　わがよはひこそ思ひしらるれ

一三　末とほく昔ちぎりし人もなし

【式目】恋（ちぎりし）「恋の心、…ちぎり」（連珠合璧集）　昔（一座一句物）

【語釈】○**末とほく**…末永く。「かくばかりうきめをみるに末遠くながらへむ世の人ぞかなしき」（心敬集・懐旧・262）。「すゑとほく　たえせぬ代代の」（宗祇集・文明三年長歌・267）。○**昔ちぎりし人**…昔、末永く共に生きようと約束した人。「もろともにむかしちぎりしことのはをただまぼろしのつてにきくかな」（為忠家初度百首・楊貴妃・734・藤原盛忠）。「末遠く契るもあやし相思ふ中だにかはるならひなしやは」（新明題和歌集・疑行末恋・3356・雅喬）。「あだ人ながらながらへやせむ／すゑとをくたのむもさだめなき物を」（三島千句第五百韻・46／47）。「契りしは夢なりけりと人もなし／ふるき枕はたゞ秋の風」（心敬僧都百句・恋・2267）。

【付合】自分が年老いたことをしみじみふりかえり、昔、共に生きようと約束した人ももういないことを詠み、寂しさを強調した付け。

【一句立】一句では、「人もなし」を、心変わりしていなくなってしまったと取る。述懐から恋への転換の句。なお、「老に昔」は可嫌打越物であり、ここからは恋を続ける必要がある。

【現代語訳】自分の年を本当に思い知ることだよ。末永く一緒に生きようと昔約束したあの人ももういないのだから。

【他出文献】老葉（吉川本）1088

（初折・裏・六）　末とほく昔ちぎりし人もなし

一四　あだなるものをなにたのみけん

【校異】「たのみけん」①頼らん（みけんイ）

【式目】恋（あだなる）

【語釈】○**あだなる**…不実な。「げにあだなりや今はたのまじ／後の世をいのれと神や思ふらむ」（萱草・神祇の連歌

四九

五〇

の内に・1701／1702）。**○なにたのみけん**…どうして頼みにしたのだろうか。「あだひとのなさけばかりのいつはりをしらでやふかくたのみそめけん」（従二位顕氏集・恋・10）。

【付合】恋の意を続ける。恋人と別れてしまったことを詠む前句に、相手の言葉を信じてしまったという後悔の思いを付けた。

【一句立】不実な約束であったのに、どうして頼みにしてしまったのだろうと、裏切られた心情を詠む句。

【現代語訳】末長く一緒にと、昔約束したあの人ももういない。不実な約束であったのに、どうして頼みにしてしまったのだろう。

【他出文献】老葉（吉川本）845

一四・一五の付合は、文明十三年の『初編老葉』の編纂に際して、恋連歌上に置かれる。

（初折・裏・七）　あだなるものをなにたのみけん

一五　なるるまは風まつ雲のわかれ路に

【校異】①「なれぬまは風さり」（なるゝまは風まつ雲のかよひちにイ）

【式目】恋（なるる）　離別（別れ路）　聳物（雲）　雲…如此聳物（可隔三句物）　雲与雲（可隔五句物）

【語釈】○**なるるまは**…うちとけている間は。「なるる間」は、恋人と慣れ親しむ時間をいう。校異①は意味上不審。「なるるまのあはれにつひにひかれきていとひがたくぞいまはなりぬる」（風雅集・恋三・1141・永福門院）。○**風まつ雲**…風に吹かれてちりぢりになるのを待っている雲。消え失せやすく、はかなく頼みにならないイメージを持つ。「つらくのみ見ゆる君かな山のはに風まつ雲のさだめなき世に」（続千載集・恋五・1545・平兼盛）。○**別れ路**…人と別れていく路。「いとによる物ならなくにわかれぢの心ぼそくもおもほゆるかな」（古今集・離別・415・紀貫之）。ここ

は雲が別れていく。雲が行き来する路として恋のイメージのある「かよひ路」があり、「わかれ路」も恋の印象を併せ持つ。「あまつかぜ雲のかよひぢ吹きとぢよをとめのすがたしばしとどめむ」（古今集・872・良岑宗貞）。「あかなくにわかれぢさそふ山のはの雲にともなふ月もうらめし」（慕風愚吟集・寄月別恋・207）。「袖訪ふ月の影も恨めし／夜深くも忍びて出づる別れ路に」（新撰菟玖波集・恋上・1605／1606・御製（後土御門院））。

【付合】前句は「あだなるもの」を、はかなく短い逢瀬として、はかなく短い逢瀬をどうして頼みにしたのだろうと思い返す句。そして、そのはかない逢瀬を散りゆく雲の様に例えて付合としている。

【一句立】少しもとどまらず散り、別れていく雲の様を、恋人との短い逢瀬の時間とした。風に散る雲の情景を使い、恋人と会う幸せな時間も、ほんの一瞬でしかないことをいう。

【現代語訳】あなたとうちとけていられる間は、本当に短くて、まるで風に吹かれるのを待ってすぐに散り散りとなる雲同様に、すぐに別れの時となる。こんなにはかなく短い逢瀬をどうして頼みにしたのだろうと思うが、それでも、心待ちにせずにはいられないのだ。

【他出文献】老葉（吉川本）846

（初折・裏・八）　なるる間は風待つ雲のわかれ路に
一六　月も旅なる暁の山

【式目】秋（月）　羈旅（旅なる）　月与月（可隔七句物）　暁只一其暁一（一座二句物）　山（山類）

【語釈】○**月も旅なる**…月も空を旅している。「影やどす花やおほのゝ女郎花月も旅なるつゆの手まくら」（蒲生智閑和歌集・秋・女郎花多・312）。「おきいでよながき夜明す草まくら／月も旅なる空のゆくすゑ」（三島千句第七百韻・5／6）。○**暁の山**…暁の頃の山。「なほうきはくもらぬなのみのこるよの月はとまらぬあか月のやま」（秋篠月清

集・入後月・1196）。「有明の月の暁の山／吹き下ろす風の紅葉葉秋もなし」（新撰菟玖波集・秋下・1004／1005・よみ人しらず）。

【付合】一所に長く滞在しない旅の様を、風に吹かれて定めなくうつろう雲の様子にたとえ、月もまた空を旅していると表現した。風、雲と、月とで表した暁の空の様子が、旅の慌ただしいさまをきわだたせる。

【一句立】旅人同様、月も空を旅していると、月を擬人化した表現の句。

【現代語訳】その場所に慣れる時間は短くて、まるで風を待って雲が別れていくようにあっという間に別れていく、そんな旅の別れ路。明け方に出立すれば、月もまた旅をしているかのようにみえる暁の山のあたりであることだ。

（初折・裏・九）　月も旅なる暁の山

一七　天つ雁夜の高嶺に声わびて

【校異】「に声」③「に在（を越イ）り」　「わ」②⑤「さ」

【式目】秋（天つ雁）　夜分　高嶺（山類・体）

【語釈】○**天つ雁**…空を飛んでいく雁。「天つ雁霧のあなたにこゑはして門田のすゑぞ霜にあけ行く」（風雅集・霧中雁・555・後伏見院）。「長月寒み有明の霜／天津雁砧の上に声更けて」（竹林抄・秋・393・心敬）。「月はひとりや山路こゆらん／天津雁こゑ〳〵おちてくるゝ野に」（葉守千句第五百韻・4／5・宗長／宗悦）。○**高嶺**…高い峰。「庭はまだはまゆふばかりふる雪にいくへたかねの遠のしら雲」（宗祇集・浅雪・171）。○**声わびて**…声がわびしくせつなく聞こえて。「きりぎりすよる松風にこゑわびてあくるより又日ぐらしのこゑ」（拾玉集・相思夕上松台立　蚕思蟬声満耳秋（文集百首）・1936）。「さえ渡る夜ぞ橋に霜降／かさゝぎの嵐にまよふ声わびて」（萱草・雑・1213／1214）。

【付合】夜中、遠山に雁の声が寂しく聞こえ、月も次第に空をめぐる。そんな夜の時の流れを詠んだ付合。

【一句立】雁の声が聞こえる秋の深山の情景。

【現代語訳】月も空をめぐり暁には山のあたりにきた。夜空を飛んでいく雁は、高い峰にわびしげな声をひびかせている。

（初折・裏・十）　天つ雁夜の高嶺に声わびて
一八　時雨にうつる秋の寒けさ

【式目】秋（秋の寒けさ）　降物（時雨）

【語釈】○**時雨にうつる**…時雨が降る時期へと次第に移行していく。「時雨」は、秋から冬にかけての、降ったりやんだりする雨のこと。初冬のものとされるが、この句は、いずれ時雨の時期になる晩秋の句。「神無月ふりみふらずみ定なき時雨ぞ冬の始なりける」（後撰集・冬・445・よみ人しらず）。「今朝のまの日影かきくもり山風の時雨にうつる空をみすらん」（邦輔親王集・時雨知時・348）。○**秋の寒けさ**…秋の寒々しい様子。「思ひきや秋の夜風のさむけきに妹なき床にひとり寝むとは」（拾遺集・哀傷・1285・大弐国章）。「さ夜ころもあかつきかけてうつこゑに／人の目さますす秋のさむけさ」（三島千句第二百韻・5／6）。

【付合】すみきった秋の夜空に鳴く雁の声に物悲しさを感じた前句に、次第に寒く陰鬱な時雨の季節に移って行くと詠む句を付け、季節の推移とそれに伴う自然の変化を述べた。

【一句立】晩秋の寒々しい感覚を時雨の予感からとらえた。

【現代語訳】夜空を飛ぶ雁が峰に寂しげな声をひびかせ、時雨の季節に移って行く、あたりの秋の寒々しさよ。

（初折・裏・十一）　時雨にうつる秋の寒けさ
一九　露さへやわが住む里をあらすらん

【校異】 あらすらん　①忘るらん（あらすらんイ）

【式目】 秋（露）　降物（露）　里（居所・体）

【語釈】 ○**露さへ**…露までもが。「露トアラバ、…雨之類」（連珠合璧集）。「秋の露払ふもおくも夕暮の風のままにやあらすふるさと」（称名院集・故郷秋夕・619）。「ことの葉の種や玉さくたかみ草／露さへきよししげる木のもと」（文明八年四月二十三日何船百韻・発句／脇・政長／宗祇）。○**里を荒らす**…年を経て次第に荒れていく里では、庭に繁茂した草に露が宿り、さらに荒涼としたイメージとなる。「里は荒れて庭も籬も秋の露やどりなれたる月のかげかな」（俊成卿女集・月・110）。「あれにけるふしみの里のあさぢ原むなしき露のかかる袖かな」（続千載集・雑上・正治百首歌奉りける時・1744・式子内親王）。「故郷を草葉の露や荒らすらむ／旅寝の山の秋の初風」（新撰菟玖波集・羈旅・2182／2183・法橋兼載）。

【付合】 秋が深まり寒々しさが増してくる様子に関して、庵の庭の露の多さを述べ、心細くながめる心情を詠んだ。

【一句立】 繁茂した草木に置く露の多さに、里のさびしく荒れた様子をさらに感じた句。秋の四句目であり、「露」、あれた「里」などの語句は、句境の転換が念頭に置かれていよう。

【現代語訳】 時雨の降る頃へと移っていくこの秋の寒々しさよ。草木に置く露までも、私の住むこの里を荒れたものにしているのだろうか。

【訳注引用文献典拠一覧】

式目の引用は京大本『連歌初学抄』（『京都大学蔵貴重連歌資料集一』（平成一三・臨川書店）（連歌新式、新式今案共に））による。『連歌新式追加並新式今案等』を参考として挙げる場合は、木藤才蔵『連歌新式の研究』（平成一一・三弥井書店）所収太宰府天満宮文庫本によった。

【語釈】等における和歌の引用は、『新編国歌大観』『新編私家集大成』CD-ROM版を使用し、本文は断らない限り『新編国歌大観』CD-ROMによる。『草根集』は日次本（『新編私家集大成』所収書陵部蔵御所本）を使用し、詠歌年時がわかる場合には付記した。歌の理解に必要な場合には、『新編国歌大観』所収の類題本（ノートルダム清心女子大本）の表現も付記している。また、万葉集の歌番号は西本願寺本の番号によった。連歌等の引用は、以下に示す諸本による。

源氏物語…日本古典文学全集『源氏物語二』（昭和四七・小学館）所収大島本
連珠合璧集…『中世の文学連歌論集一』（昭和六〇・三弥井書店）
文明十八年二月六日何人百韻…『宗祇の研究』（昭和四二・風間書房）所収大阪天満宮文庫本
菟玖波集…金子金治郎『菟玖波集の研究』（昭和四〇・風間書房）所収広島大学本
文明十三年二月二十四日何船百韻…『宗祇の研究』（昭和四二・風間書房）所収早大図書館本
竹林抄…新日本古典文学大系『竹林抄』（平成三・岩波書店）所収野坂元良氏蔵本
三島千句…古典文庫『千句連歌集五』（昭和五九）所収鶴見大学本
心敬僧都百句…貴重古典籍叢刊5『心敬作品集』（昭和四七・角川書店）所収岩瀬文庫本
老葉（吉川本）…貴重古典籍叢刊12『宗祇句集』
萱草…貴重古典籍叢刊12『宗祇句集』所収伊地知本、『連歌大観一』も参照。
新撰菟玖波集…『新撰菟玖波集全釈』第一～第八巻（平成一一～一九・三弥井書店）所収筑波大学蔵本
葉守千句…古典文庫『千句連歌集六』（昭和六〇）所収北野天満宮本
文明八年四月二十三日何船百韻…江藤保定『宗祇の研究』（昭和四二・風間書房）所収京大谷村文庫本

「春日の末社左抛」考

一

『宇良葉』所収の「春日左抛御前法楽独吟百韻」の末尾には、次のような記述がある。[1]

此百韻は将軍家の御会にはしめて
めしくはへられ侍し時春秋／五十六歳春日の
末社左抛の御前に祈念のこと
ありて彼御社の名を発句の中に
かくして手向侍しを程へて後
独吟の功を三時に終侍し也おほよそ
この神にいのり申す事いさゝかその
よしある事になん

すなわち、宗祇は、文明八年、五十六歳の時に、室町幕府将軍家の連歌会に初めて参加するにあたり、春日の末社左抛社に祈念するところあって、この百韻を詠んだ。宗祇が参加した将軍家の百韻は、同年正月二十八日におこなわれており、『言国卿記』によれば、二条持通、青蓮院尊応、実相院増運、日野勝光、聖護院道興、細川政国、杉原伊賀守賢盛、杉原長恒、明智政宣、山科言国らが参加し、足利義尚の発句、二条持通の脇であった。おそらく杉原賢盛の推挙によって、ここに初参加の宗祇は心中期するものがあったであろう。[2]

百韻の発句「朝なけにさしそふ春のひかりかな」も、『宇良葉』の春の発句の部に「将軍家の御会にまいるへきよし侍しとき、春日左抛明神に立願したてまつるとて」と詞書に書かれて入れられている。この句は、春発句中第三十九句目にあり、梅、霞の発句から、この句をはさみ、再度梅、そして柳の発句が配列されており、早春の句である。

この百韻は独立に流布し、その張行年月日は、文明八年の正月十一日、正月十八日、三月十一日、四月十一日、同十五日、同十八日、文明九年正月十一日などゆれがあるが、発句は、将軍家の連歌始以前に手向けているであろうと考えられよう。

さて、宗祇が百韻を奉納した社は、「春日の末社左拋」という記述から、春日神社の末社と考えることが適当であるが、いかなる神社なのであろうか。これについて改めて検討したい。

二

春日末社に「左拋」と表記する神社は現在存在しないのだが、先行研究で、おそらくこの神社であろうと推測されるのが、末社のうちの佐良気神社である。佐良気神社は、建保四年（一二一六）に、大東遠忠が近衛基通に、摂末社の読み方を仮名でふるように命じられ注進した「春日小神日記」（『春日社旧記』巻十八所収）[3]には、「佐良気（サラケ）」、また「佐良介」と表記されており、同年に書かれた『春日御社小神名并御在所注進文寫』[4]にも「佐良介（サラケ）」と書かれている。

この後、紙背の具注暦より文暦元年（一二三四）以降に書写されたとわかる『春日神社御本地并御託宣記』[5]に「佐良気」と表記され、弘長二年（一二六二）付の中臣祐賢注進の『春日若宮本地事并大明神御垂跡』[6]には、「佐良気明神」、応永三十四年（一四二七）の造替記録である『春日若宮神殿守記』[7]に、「佐良気御社」と書かれ、永享九年（一四三七）に書写された『春夜神記』[8]にも「佐良気」と書かれていた。また、『大乗院寺社雑事記』[9]（寛正二年（一四六二）九月十日条）には「サラキ」と表記されている。同記には文明三年の十二月十九日条にも「サラキ御社」、同二十三日条に「佐羅気社」という記述が見え、左拋百韻が奉納された文明八年にごく近い時期まで、佐良気神社は「サラキ」と呼ばれて存している。

だが、文禄二年（一五九三）書写である、『春日御社記録』[10]に「左投明神、又左良気明神トモ号、尾張国ヨリ勧請」と書かれ、末社に「左投明神」が「左良気明神」とも呼ばれながら存在していること、この神は、尾張国から勧

請したことが書かれているのである。

春日社の摂社末社の研究を『春日の神々への祈りの歴史』[11]に著している大東延和氏は、『春日御社記録』の記述から、佐良気神社を愛知県の猿投神社を勧請したものと推定された。さらに、同氏は、平成六年十月に、金子金治郎氏が、「（春日左抛法楽百韻の）コピーを携えて来社され、当社に親しく参拝された」ことから、宗祇の佐良気明神への信仰を衆庶の信仰の直接的資料の一例と見なし、「この「末社左抛」が「佐良気」であることはまず間違いないとして」著書の記述をすすめられている。一方、大東氏の知見を元に、金子氏も、宗祇の祈念した左抛明神は、佐良気明神であるとし、さらに、左抛＝猿投と考えられたのであろう、社の祭神に関しても、猿投神社の祭神大碓命に祈念したとして宗祇の祈念のねらいを考えられている。すなわち、「春日左抛御前法楽独吟百韻」の先行研究である金子氏の論からは、宗祇は猿投明神に祈念し、祭神大碓命の形象、気質に沿って願い事をしたと見えるのである。[12]

だが、『春日御社記録』をみる限り、この記述は、「左投明神」が「左良気明神」であり、「左投明神」は尾張国より勧請したという二つの説を別々に述べていよう。

『宇良葉』の成立時期は明応九年（一五〇〇）の夏から七月十七日以前と考えれば、[13]宗祇の記述からは、この時期に、百韻を春日末社の「左抛神社」に法楽祈念したと認識している。言い換えれば、宗祇はこの頃ある春日末社を「左抛」社と認識していた。確証はないが、名称の類似からは、「佐良気神社」が「左抛神社」であると見なすことは一説としてとりえよう。

しかし、それが猿投明神の社であると断定することは、問題ではないかと考える。後代の記述であること、また『春日御社記録』に依拠する大東氏、金子氏共に注意していないが、猿投明神は、尾張国ではなく三河国の神であること、こうした点で、やはり性急な結論と考えられよう。

猿投神社の名称と表記に関して見れば、『延喜式神名帳』三河国に、「狭投神社　一座」と見える。[14]『延喜式』から鎌倉末までの間の資料は見出せないが、[15]文永十一年（一二七四）七月十五日付の中条頼平寄進状案[16]には「猿投社」と

書かれ、嘉元二年（一三〇四）八月に六条有忠に依頼した神号額[17]は、「正一位猿投大明神」である。南北朝期、猿投神社を有する高橋庄の地頭中条氏関係文書では既に「猿投」が通用している。また、一座であったものが時期は不明であるが三座となり、「三所大明神」（「貞和五年年中祭礼記[18]」）とも呼ばれてくる。以後、「猿投御宮」（文明元年六月付「中條？某安堵状」）、「三所大明神」（享禄二年三月二十一日付「律師宥存寄進状」）、「猿投」「さなけ」（天正四年九月五日付「佐久間信直判物」）のような記述が見られ[19]、南北朝期の『足助八幡宮縁起』には、「猿投大明神」としており[20]、こうしたことから、猿投神社をさすならば、宗祇の頃には「猿投」の表記で、「さなけ（げ）」と読んでいると思われる。のちに、文禄元年（一五九二）九月には、『兼見卿記』に「三州賀茂郡之内」にある「サナキ大明神」の社頭の壁の周囲の竹を掘り取ったたりに関して、「サナキ大明神」との記述がみられる[21]。その三年後の、猿投山社有林の竹伐採を禁じた秀吉の朱印状には「さなけ山」とあった（文禄四年九月廿一日付豊臣秀吉朱印状[22]）。これらから、「投」は「け」または「き」と読め、『春日御社記録』の時期にも、猿投神社は「猿投」の漢字に「さなけ（げ）」「さなき」と読まれていたと思われる。『春日御社記録』の言う、尾張国から勧請という点については、わずか一年前の『兼見卿記』が、「サナキ大明神」は「三州賀茂郡」にあるとはっきり記しているゆえ、『春日御社記録』を全て信じるとすれば、春日社の社は、「尾張」と三河は隣国ではあるにしろ、三河にある「猿投」とは直接に結びつかない可能性も考えねばならないだろう。管見に入る限り典拠不明であるが、国についての誤認か。猿投社の社勢が強まり、喧伝されたことで、文禄年間には『春日御社記録』の記述のような認識が生まれてきたのであろうか。

なお、猿投神社が大碓命を祭神とするという記述については、「人皇十二代景行帝第一皇子大碓命也」とする[23]『延喜式神名帳頭註』が最も早く[24]、宗祇の時期の記述にまで遡りえないことも付記する。

さて、宗祇が「左拋」と明確に記す以上、「春日末社左拋」を解明するために、他所の「左拋」明神を探索しなければならない。すると、大和金峰山寺に左拋明神を見出すことができる。吉野八社明神の一柱であり、地蔵菩薩が本地とされる[25]。左拋明神は、吉野の蔵王信仰に関係している。が、吉野八社明神に入っていても、その創建は不明であ

五九

り、祭神も、手力雄命とされるが、はっきりしないようである。しかし、この宮は「佐抛社」として少なくとも康正四年（一四五八）には金峰山寺に存し[26]、また、例えば、西大寺蔵であり、元亨三年（一三二三）頃から鎌倉時代最末期までに制作されたと推定される、吉野山の仏と神の体系を表す吉野曼荼羅には、左下に佐抛明神が描かれていた[27]。こうした吉野曼荼羅は、長享三年（一四八九）には南都絵所座で製作されていた[28]。

元来、金峯山寺は、平安末から中世には、興福寺の末寺であり、検校（別当）も興福寺の一乗院・大乗院門跡から補任されていたという[29]つながりがあった。『大乗院寺社雑事記』によると、宗祇は、寛正七年閏二月二十日、吉野の花見の帰途に大乗院の尋尊を訪問していることを始め、大乗院との関係は密である。百韻奉納の前年九月には、一条兼良をたずね、奈良に滞在していることも同記からわかる。さらに、文明八年の将軍家連歌始で脇を詠んだ二条持通の息は、大乗院尋尊の後継者として、大乗院に入室し勉学中の政覚であった。他方、宗祇が三河の猿投神社を訪れたという事跡は、現在のところ管見に入らない。

この吉野の「左抛社」は、むしろ、興福寺を通して、春日から勧請されたものなのではないか。加えて、『記録』の記された文禄二年から二年後の文禄四年には、吉野の佐抛社は寺領配当にもれている[30]から、既に衰退していたとおぼしく、それゆえに『記録』上に現れにくいこともあるのではなかろうか。

なお、三河猿投神社に関して他国とのつながりをさらに見れば、同神社の蔵する貴重な漢籍に、鎌倉時代の古写本が多く見られるのは周知のことである、十四世紀初頭の典籍の転写・流伝状況が奥書からたどられる。漢籍には岡崎の真福寺（現岡崎市真福寺町）、田原の長仙寺（現愛知県田原市六連町）などの三河国の他寺での書写本が存し、三河国の幅広い寺院ネットワークの中から集積したと考えられている[31]。

十五世紀に至ると、猿投神社神宮寺である白鳳寺の僧澄誉は、応永二十一年に真福寺（現名古屋市中区大須）の第三世任瑜から伝法灌頂印信を受け、多くの聖教を書写している。猿投神社が真言宗寺院の真福寺とつながりをもっていたことがわかり、高野山の影響の強さを考えることができる。先の享禄二年三月二十一日付「律師宥存寄進状」

も、「三社大明神　高野四所大明神」に対する寄進であった。[32] 同様に高野山の影響の大きい吉野とも、猿投社はそこから繋がってくるのではないかとも考えられる。

このように考えてくると、春日大社の末社としての左拋明神が吉野や三河など各所に勧請されて、それぞれにその地方で発展し、後世にその痕跡を明確に残している一方で、本体の左拋明神は存在を次第に薄れさせたという事実を受け入れるのが最も自然かと思われる。今後の課題は、春日神社の末社左拋明神の盛衰を明らかにし、その痕跡を探索発見することである。

最後に、宗祇が左拋明神に祈念した内容についても少し検討する。金子氏は、猿投神社の祭神大碓命の性格から、大碓命の人柄は「勇猛な小碓命と対象的に柔弱な人柄」であり、宗祇の「願う真意が、武勇よりも、人間らしい柔和にあったことは確か」とする。そして、宗祇がその柔和を祈念するのは若い新将軍に対してであるとしている。[33] しかし、本来「法楽」とは、自らの願いを祈念するものであるはずである。ここは、宗祇自身が、将軍の恩恵を受け、その幸いを句に詠み出した発句であると考えたい。朝に、昼に、春の光が一段と加わる、すなわち、宗祇は、左拋明神の力により将軍の連歌会に参加するという僥倖を得て、かつ春日の神のみ恵みに浴することもできた。その喜びの句をささげているのではあるまいか。

注

（1）『宇良葉』の引用は、櫻井健太郎氏蔵本（国文学研究資料館紙焼き写真）による。

（2）『言国卿記』は史料纂集を参照。なお、金子金治郎「宗祇の謎―『宇良葉』三百韻を読む―」（『国語と国文学』第七十三巻第九号・平成八年九月）は、将軍足利義尚の発句とし、前将軍義政も出詠とする。ただし、義政の出詠の根拠は、大日本史料が挙げる『後鑑』所収義政将軍記の「愚句」であるが、同資料は飛鳥井雅親の句集『愚句』（『連歌大観』第一巻所収本の番号1075～1102が当該箇所となる）であり、義政の出詠は証明できない。

両角倉一『連歌師宗祇の伝記的研究　旅の足跡と詳細年譜』（平成二九・勉誠出版）は、発句を義政とする。義尚は、文明五

年十二月、九歳の時に、将軍職を義政からゆずられたが、義尚主催の月次の歌会は文明十年からと考えられており（井上宗雄『中世歌壇史の研究 室町前期』（改訂版昭和五九・風間書房）、連歌会始の主催はどちらか判断に迷う部分であるが、まず『言国卿記』に従っておく。

（3） 藤原重雄・坪内綾子・巽昌子「中世春日社社記拾遺」（『根津美術館紀要』四・二〇一三）所収東大史料編纂所所蔵『春日小神日記等』翻刻による。

（4） 『神道大系神社編　春日』（昭和六〇・神道大系編纂会）所収本、五〇頁による。

（5） 『神道大系神社編　春日』（昭和六〇・神道大系編纂会）所収本、三七頁による。

（6） 注3論文に掲載の宮内庁書陵部所蔵九条家本の翻刻による。なお、注3論文は、この書を「祐賢注進状の抄出であるようだ」と見ているが、『神道大系神社編　春日』所収の二種類の『中臣祐賢春日御社縁起注進文』よりも時期が先行することを指摘している。なお、神道大系の『中臣祐賢春日御社縁起注進文』において該当部分の名称に相違はない。

（7） 『続群書類従』巻三十七所収本による。

（8） 『神道大系神社編　春日』（昭和六〇・神道大系編纂会）所収本、一八六頁による。

（9） 『続史料大成』所収本による。

（10） 大東氏著書『春日の神々への祈りの歴史』（平成七・私家版）一一五頁で、無窮会図書館本を使用されたことが示されている。『神習文庫図書目録』（昭和一〇・無窮会）に、「春日御社記録　文禄三年　寫　一　二五八　井」とあるものが該当する。しかし、二〇一八年一月現在、無窮会専門図書館は改修工事のため、閲覧・複写を停止しており、閲覧がかなわない。閲覧・複写再開の時期も不明とのことであるので、再開時、閲覧をなすこととして、大東氏著書に従う。

（11） 大東延和『春日の神々への祈りの歴史』（平成七・私家版）。大東氏は、「一方、文禄二年（一五九三）の『記録』には、「左投明神、又左良気明神トモ号、尾張国ヨリ勧請」とあるが、この左投は今日の愛知県西加茂郡の元県社、大碓命を主神とする「猿投（さんなげ）神社」をいうのであろうか。」とする。

（12） 大東氏の説を受け、金子金治郎氏は、「然し当面する祭神問題は、宗祇が「春日左抛御前法楽」と明記する以上、文禄二年『記録』に「左投明神、又左良気明神トモ号、尾張国ヨリ勧請」とあるに従って、尾張国の猿投神社の主神大碓命（おおうすのみこと）を祭神と考えることになる。」と述べる。さらに氏は、大碓命の人柄を「勇猛な小碓命と対象的に柔弱な人柄」であり、宗祇の「願う

真意が、武勇よりも、人間らしい柔和にあったことは確か」とする。金子金治郎「宗祇の謎―『宇良葉』三百韻を読む―」（『国語と国文学』第七十三巻九号、平成八・九）。

(13) 『宇良葉』成立時期は貴重古典籍叢刊12『宗祇句集』（昭和五二・角川書店）解説（湯之上早苗・金子金治郎）の推定による。

(14) 新訂増補国史大系本による。

(15) 太田正弘『猿投神社の綜合研究　上』（平成四・私家版）参照。

(16) 豊田資料叢書『猿投神社中世史料』（平成三・豊田市教育委員会）四頁所収書状写真による。

(17) 豊田資料叢書『猿投神社中世史料』（平成三・豊田市教育委員会）三三〇頁所収額写真による。

(18) 『愛知県史　別編　文化財4典籍』（平成二七・愛知県史編さん委員会）第四章第二節「猿投神社」所収図4-59写真による。

(19) いずれも豊田資料叢書『猿投神社中世史料』（平成三・豊田市教育委員会）所収写真による。

(20) 『続群書類従』所収本による。

(21) 『兼見卿記』の引用は、『史料纂集　兼見卿記第4』（二〇一五・八木書店）による。

(22) 豊田資料叢書『猿投神社中世史料』（平成三・豊田市教育委員会）所収写真による。

(23) 『群書類従』神祇部所収本による。

(24) 太田正弘『猿投神社の綜合研究　上』（平成四・私家版）に指摘がある。

(25) 例えば『金峯山創草記』に、「一諸神本地事…佐拋地蔵」とある。首藤善樹編『金峯山寺史料集成』（二〇〇〇・国書刊行会）。

(26) 首藤善樹『金峯山寺史』（二〇〇四・国書刊行会）第三部堂社僧坊の、佐拋社の項参照。なお、康正四年の書き入れを持つ『当山年中行事』には、「二月頭御木口目録」に「佐拋宮十枚／二升」と記されている。

(27) 行徳真一郎「奈良・西大寺所蔵吉野曼荼羅図について」（『ミュージアム』572号・二〇〇一）参照。

(28) 『大乗院寺社雑事記』長享三年二月二十八日条（増補続史料大成）。

(29) 鈴木昭英「修験道当山派の教団組織と入峯」（『吉野・熊野信仰の研究』（昭和五一・名著出版）参照。『大乗院寺社雑事記』文明十五年九月条後付に、「吉野検校事」として大乗院・一条院門跡の名の記載がある。

（30）首藤善樹『金峯山寺史』（二〇〇四・国書刊行会）第三部堂社僧坊の、佐抛社の項参照。

（31）山崎誠「猿投神社所蔵漢籍群」（『愛知県史　別編　文化財4典籍』（平成二七・愛知県史編さん委員会）

（32）ただし、高野四社大明神が「猿投社に祀られてゐたか否かは、史料を缺く」と、豊田史料叢書の当該文書の注・解説部分にある。

（33）金子氏は、注12論文で、「ともあれ左抛明神は、人の和を尊ぶ神であり、しかも春日の神の慈光に包まれている。新将軍の前途をこの神に祈念した理由も、その点にあったろうと思う。」と記述する。

この訳注及び「「春日の末社左抛」考」は、科研費基盤研究C（17K02421）「独吟百韻分析による宗祇連歌の多面的新研究」の成果である。

A Translation and Annotation (2) of the Century of Solo Compositions (Hyakuin) Dedicated to Kasuga-Sanage Shrine in Sakurai's Possession with "A Study on Kasuga Massha Sanage" for a Suppliment

Nobue Ito and Isao Okuda

When Sougi participated in a consecutive poem competition held under the sponsorship of the shogun of Muromachi Shogunate for the first time, he composed the Hyakuin dedicated to Sanage Myojin. It had an important meaning for understanding the literature of Sougi. We, Ito and Okuda, tried to translate and to annotate them. In this work, we handled verses number 11–19, and in addition gave a consideration on Sanage Myojin.